



「燃料電池」で環境救おう

鳥取ガス株式会社

取締役社長

児嶋祥悟

地球温暖化を防止するために、気候変動枠組み条約を定めた「京都議定書」が交わされてから一〇年。しかし、地球環境は改善されるどころか、ますます悪化の一途をたどるばかりだ。一体だれが責任をとるのか。

私は一念発起して、環境改善の旗手といわれる「燃料電池」を、自らの家庭に取り付けた。天然ガスから取り出した水素を酸化させる過程で発電させるもので、空気を汚さず、経済効率も高いといわれる。

「燃料電池」は二酸化炭素の排出を二七％抑え、電力消費を六〇％削減し、光熱費が四人世帯で三万から四万円安くなるという。そこでわが社は、新エネルギー財団（国の外郭団体）の実証事業に参加したのである。

先ごろ開かれた条約加盟国会議でも、日本は京都議定書を「汚した」と厳しく批判され、NGOに「ワースト賞」の烙印を押された。環境問題待ったなし。二年の試験を経て発売される「燃料電池」で、大いに使命を果たしたい。